2023年12月16日(土)14:00~14:35

「藤原康博 記録の稜線を歩く」アーティスト・トーク 於:柳原義達記念館 A 室

藤原康博氏:

こんにちは、藤原康博です。今日はお集まりいただきありがとうございます。今回の展覧会については、皆さんにもらっていた資料の裏に僕のテキストがあるのですが、稜線というのをキーワードに展示を行いました。この展覧会のお話をいただいたのは去年の7月くらいで、それからいろいろと考えて制作を具体的にし出したのは、去年の年末から今年にかけてなので、ほぼ今年度の制作になります。

その過程においての話なんですけれど、なぜ稜線なのかということなんですけれど、見ていただくと僕の平面を中心にした作品と、あと柳原義達さんの彫刻があるんですけど、かなり最初迷って、どういうことをキーワードに、架け橋にできるかなと思って考えていました。稜線というのを思いついた時に——稜線自体は山岳用語、峰と峰をつなぐようなラインという認識だと思んですけど——これは僕が美術系の予備校に通っていた時に、いわゆる石膏デッサンとか、よくあるやつですね、美術室とかにもあるような、ああいうのを木炭で描いたりとかするんですけど、僕自身はそんなにできなかったんですけど、その像の形を捉える上で言われたのが、蟻の目線になって形を拾ってきなさいというようなことを言われて、それはパツと見た目では分からない、実際に近づいてみるとよく分かる、見えない形、不思議に変化していく形という。どうしても目っていうのは、輪郭や分かりやすい形に囚われがちなので、見えないところを捉えていくということ、見えないというか見えているんだけど、認識できない部分とか、そこをよく捉えろということだったと思うんですけど、僕自身は、すごくそれが、近づいて見たりとかしても、理解していたのか理解していなかったのか分からないんですけどその当時、すごい勝手に妄想していたというか、形を見上げた時に、すごい崖のように見えたりとか、ブルータスの首がくっつと曲がっているところに、何かそういうごつごつした空間を、自分が小さな生き物になったような視点で見ていたというような記憶があったんですね。

最初にその柳原義達さんの作品なんですけれど、これも、僕が、この記念館ができて、展覧会を見に来た時に、こちらに見に来て、それで鴉や孔雀鳩やそれから裸婦像をいろいろ見て行った時の、最初の印象なんですけれど。とくに僕が今これ[この柳原さんの作品]は、今回は僕がこの展覧会のためにセクションしました。どの彫刻が自分の作品と関係性ができるかということでいろいろ考えて、だいが何回も通って、一時期さわれるっていう、柳原義達の彫刻にさわれるっていう時もあったので、それもさわりに来ました。さわって何だかんだしているうちに、その稜線ということも思いついたんですけど。

柳原義達さんの彫刻、もちろん彫刻は非常に塊で、絵画より、そこにあるリアルなものだと思うんですね。そのことと僕の平面を中心にした作品が対峙した時に、やはりこのものの強さというか、非常にこの強いアウラを発散する、醸し出す、そのもの自体の強さっていうのが、どこで関係性を持てるのかっていうところで考えていました。彫刻にももちろん、立体を描く時に予備校で言われたような稜線っていう考え方があると思うんですね。絵画の場合も、その稜線という捉え方があって、これは一つ、つながりとしてできるんじゃないかなと思って、稜線をテーマにこの展覧会を考えました。

柳原義達さんの作品を僕が初めて見た時の印象は、若い頃の作品というか昔の作品は結構肉薄するような感じで作ってある彫刻があるんですけど、僕が見て印象に残っていたのは、今ここに展示してあるような彫刻なんです。一番印象に残っていたのは、僕は鴉なんですけれど、鴉のようで何か鴉じゃないような、すごい塊の、ごつごつした塊。それが僕はその当時、ちょっと風景のような、岩場のようなごつごつしたものに見えた印象があって、それが何

か、はじめて見たようなものではない何か、親和性というかちょっと感じるものがあった、印象に残っていたんですけど、そのことと何か稜線を通して自分がやってきたことと何か関係性を持たせられるんじゃないかと思って、この展示を考えました。

僕がやってきたことというので少しお話をさせてもらおうと、こちらの展示空間[A 室]は、全部そうなんですけれど、2023年、ほぼ今年作品です。これが一番近作のスタイルです。それから、向こう[B 室]に箱に入った、段ボールに入った作品があるんですけど、それがちょっと前にやっていた作品で、20代の頃から始めたのは、写真を撮って、それも小屋ですね、納屋とかそういうのを写真を撮って、それをストックしていく、今もそれは続いているんですけど、それが今度は平面作品になって、立体作品になってという風に変化してきて、現在に至っています。

今回その入口のところ[ロビー]に柳原義達さんの作品に布を掛けさせてもらったんですけど、これがちょっと挑戦的なのというか、チャレンジングな願いをして了解をいただいたんですけど、なぜそのようにしたかという、先ほどの稜線のことにももちろんつながるんですけど、自分の作品が、これは先ほどお話ししたように、写真を撮っています。自分で布団をバツとやったものを写真に撮って、それを起こしています。その時に当然、リアルにというか写実的に描いていくんですけど、僕の中では、過程としては本物に、その写真の感じに近づけていくんですけど、出て欲しいものというのは見えていることじゃなくて、見えないものを出したいという風に思っているんです。これは言葉で説明するのはなかなか難しいんですけど。

例えば、写真があります。それをその写真のようにそっくり描けたからと言って、じゃあ良い絵なのかということ、そうではないと思うんですよ。それに何か宿るといふか、絵になる瞬間といふか、それが僕の中であって、制作の中で。そういう感じになるところ、そこが一つ完成のところなんですけれど、その感じは、先ほどお話しした、柳原さんの若い時の彫刻作品、結構リアルな形を追い求めて、突き詰めている感じなんですけれど、ある時から、非常に抽象的といふか、何か顔も、向こうにこういう裸婦像がありますけれど、きゅっと目が描いてあるくらいとか、要素をどんどん削っているといふか、見えていることをどんどん削っているといふか、それはたぶん柳原さん自身が、近づけば近づくほど、逃げ水のように、すごくそのものに近づいたと思ったらまた遠くに行ってしまうような感覚に囚われていたんじゃないのかなという風に感じて、僕自身も、そういう先ほどお話ししたような、リアルに近づけば近づくほど、近づいても出てこない見えないものみたいに、何かそういうのを出せるように、それが一つ作品が仕上がる瞬間なのかなあという風に思っています。

そのことと、そこ[ロビー]にある、布で覆ってある柳原さんの彫刻作品なんですけれど、覆うことによって、これは僕の勝手な思いなんですけれど、柳原さんの目指していた何かが見えてくるんじゃないかなとふと思って、作品に布を掛けることを提案させてもらったんですけど。あれを見てもらうと、何となくしゃがんだ、座った女性像が見えるかと思うんですけど、見えなくなったことによって見えてくるものがあるというような感覚と言うか。それを最後僕が、彫刻の横にペインティングが掛けてあるんですけど、あれが一番最後に仕上げた作品です、今回の展示で。その彫刻に布を掛けたものを描くと、再現しているわけではないんですけどその感じが出るように描くといふので、僕がずっと先ほどのお話にあった蟻になったとしたらその目線になってずっと見てきたこと、柳原彫刻を見てきたことの旅が終わるところが、彫刻の横にあるペインティングであるのかなと思いました。一つそれで今回のプロジェクトの円環ができたんじゃないかなと感じています。

今回この展示会をするにあたって、この会場が、こちら[A 室]はご覧のとおり非常に天井の高い広い空間で、向こう側[B 室]が、こちらよりは少し天井が低いですがね。それで壁の色がグリーングレーといふか、少し落ちた色なんで、こちらは外光も入るんで、非常に明るい部屋で、向こうは暗いという。向こうにはご覧のとおりベッドに乗った山が

あるんですけど、そういうちょっと対照的な空間にしよう。その間に布を被せた彫刻を置くことで、入ってきた時にそれが見えて何なんだろうという感じと、こちらとあちらの部屋を見ていただくことで、何かつながった一つの展示会の趣旨みたいなものを汲み取っていただけたらなあと思って考えました。

それで、具体的に作品の説明をさせていただくんですけど、こちらの部屋[A 室]の布団の作品なんですけれど、これは僕が 2020 年コロナのパンデミックで緊急事態宣言が出た年の秋に網膜剥離になりまして、運転中にガンツと右目の下のところが暗く欠けたんです。それで、あれっと思って、これはまずいやつだなあと。その前から飛蚊症でよく飛んでいるなあと思っていたんですけど。そしたら、こう欠けた。これはまずいなと思って医者に行ったらすぐに入院で、次の日に手術って言うんで。もう本当にすぐに手術をしていただけたんで良かったんですけど。その時の経験があったんですよ。それは、今まで見えてきたものが、網膜という膜一つがぺろっと剥がれることで、見えている世界をその膜一枚だけで処理できないんですよ、だからそこが暗く見えたりして。

そのことが、自分が作ってきたこと、小屋の写真を撮って始めて、小屋の立体物を作ったり、平面を描いたり、それから箱の中に収める、この辺も全部一貫して。小屋っていうのは、田舎なんかにはいっぱいあるんですけど、他人の、人の記憶のものが収まっていたりする建物で、それを見ていると僕は、別の次元への入口のような妄想をしてしまうんですけど、内は見えない訳ですよ。でもその中に何かが詰まっているという。そのことと立体を作り出したこと、それは箱に収めたりとか棚に収めたりとかというような、それは記憶を収めていくというような。夢日記をつけて、その夢を形に、立体物にして、それを棚に収めていくというようなことを進めた、そういうようなものはシリーズで一時期作っていた時期があって。それは立体物であったりとか、インスタレーションにしたりとか、部屋一つを倉庫のような感じに作ったりとか、そんな感じでやっていました。

山のシリーズ、板絵のシリーズがあるんですけど、古い板の上に白い山が描かれているシリーズがあるんですけど、それも「あいだの山」というタイトルにしているんですけど、何か記憶の見えない山というものが内包されるというか、物理的に目の前にあって、その向こうというようなことであったりとか。一貫してそういう見えないことっていうものにつながっていくんですけど、今回のこの山の布団のシリーズは、その[網膜剥離の]経験があった時に、退院して自宅にいる時に、動けるんですけど、やはり術痕があるんで、埃っぽいところには行かないでくれと言われて、それがまあ三ヶ月くらいは我慢してということだったので。埃っぽいところって作業場ですよ。作業場に通えないという状況が続いて、その時に、寝たり起きたり、それが昼夜逆転したりとかしていく中で、変な感覚に襲われて、何か眺めている外の風景と、内側の景色だったりとか、夜、電気を点けて間接照明を点けて、見ている天井であったりとか室内の感じであったりとか。そういうのと縋り交ぜになっていくというか、内と外が逆転していくような、そういう感覚に陥って。一時期変な感覚になっていたんですけど。その時に室内の写真を撮ろうと思って、寝ながら写真を撮ったりしていたんですけど、そういう中から生まれたのが、こういう布団のシリーズなんですけれど、まあスケール感が、でかいスケールでありながら、非常にドメスティックなものであったりとか、向こうにあるベッドの上に山がある作品もそうなんですけれど、そういうところからこのシリーズは始まりました。

それで、向こうの方[B 室]の作品には、こういうシリーズじゃないんですけど、カーテン、室内のものだったりとか、実際の山だったりとか、置物が描いてあるものだったり、トンネルや橋が描いてあるものがあったり、箱の作品があったりするんですけど、基本的には僕自身は、それらが立体も平面もそうなんですけれど、同時進行していく感じなので、一つのシリーズとか似た感じのもので統一するというよりは、わりといろいろなものがあるなかで、その空間を構成することで見えてくる、あぶりだされてくるようなものを大事にしたいと思って、展示空間を作っています。なので、いろいろあるんですけど、根底にあるもの自体は基本、何も変わらない。僕が非常に制作において出したいなと思っているものに向けて作った作品です。

質疑応答

参加者:

私は初日に来て、藤原さんに実はお話を伺って、稜線ってどういう意味ですか、山の稜線ですか、といろいろな質問させていただきました。そのあとも作品を見ていると、非常に懐かしい感じがするような、カーテンが揺れてその前にベッドがあるような、どこかで私が経験したことがあるような記憶かなあという感じがするんですね。今回の展覧会の標題は、記憶の稜線ですよね。記憶というのはそういう意味なのかなあ、それとも記憶ってドアに南京錠の掛かった作品もありますし、今お話を伺うと、写真とかも集めていたという。収めて、そこからまた記憶を出していくんだと思いました。記憶という意味と何か懐かしさを感じるというところ、そのあたりのことについてお話しいただければと思います。

藤原氏:

今お話しいただいたようなことではあるんですけど、記憶でこれっていう風に自分で定義づけしているのはないんですよ。そうやって定義づけしてしまうと窮屈になってしまうというか。時代時代、自分が20代の頃、30代の頃、40代の頃にそうやって考えてきたこと その時に思っていることみたいな。最初の頃は、ただ記憶なんですけれど、記録を取っていくという意味で写真を撮り出して、それが溜まっていくことによって生まれてくるもの。それが倉庫の作品とかにつながっていくんですけど。そういう意味での記憶という風に捉えている。

立体作品を作り出した、それは夢という、それも非常に個人的なところ、よく見る、時々見る夢があるようなことから始まったんですけど。それを形にして、箱の中に収めて、棚の中に収めて、というような作業をしました。それが少し進むと、個人の記憶というよりはもう少し集会的な記憶というか、例えばそれは皆が知っているような、共通にあるような、神話であったり民話であったり、いろいろな話が世の中にあると思うんですけど、そういうものが持っている記憶というか、そういうことに発展して、日本神話の中の一説をもとにして作ったこともありましたし。その時代その時代に記憶についての捉え方があるというか、そういう意味では統一した見解を見せているわけではないので、分かりにくい部分はあるのかなと思うんですけど。僕が描いて、例えばこのものがあるとして、この布団の山があって、それを僕が見ていて、それを僕が描くことによってできてくるものというのがあると思うんですよ。それがまた今度、鑑賞者の手元に行って感じるものがあったりとか。僕ができることとして、僕が見えないものを見えるようにすることで成立する作品があって、そのことを今度は鑑賞者の方がまた見て、先ほど言っていたような懐かしいとか、昔のことを思い出すとか、最終的にはそういうところで成立するのかなと思います。なので、捉え方はそれぞれに捉えていただいたらいいと思いますし、僕が記憶の稜線を歩くというタイトルにして提示できるものは、こういう形かなと。それと今回の彫刻との絡み合いでこの空間にいることによって、見ている方が何かを感じていただけたら、それで最終的に成立するのかなという風には思っています。

(文字起こし・編集: 鈴村麻里子 / 三重県立美術館学芸員) []内は編集時の補足

2024年5月23日版